
キミは太陽

karinko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミは太陽

【Nコード】

N8607Z

【作者名】

karinko

【あらすじ】

東京から転校してきた内気な少女、菜ノ花。いつも笑顔で、かなりの天然な少年、光。しっかり者で少しきついが素直な少女、恵美。いつも冷静だが、優しい少年、悠人。

4人の高校生活を描いた青春物語。

プロローグ 菜の花side

10月の終わりごろ。

少しずつ冬の足音が聞こえてくるような、そんな季節。

太陽みたいに明るい、キミに出会った。

私は笹川菜の花。

一週間ほど前、とある事情で東京の高校から大阪の高校に編入してきた。

…入学して一週間がたつのに、まだ友達がいらない。

というのも、（自分で言うのも悲しくなるけど…）私がすごく人見知りが激しくて、内気なことが原因だ。

今は下校時刻。

「はぁ…」

私は小さくため息をつく。と玄関をでた。

ふと、ガラスに映った自分の姿を眺める。

そこにあるのは、メガネをかけた地味で暗そうな女子生徒。

更に深くため息をつく。

私はうつむいて、とぼとぼと歩き始めた。

ちょうど運動場の前を通り過ぎようとした時。

ドンッ！

何かに押されて、体が後ろに傾いた。

突然のことだったので支える間もなく、地面に尻もちをつく。

何が起こったんだろう?? そう思って顔をあげると、

「ごめん!! いける!?!」

男の子が、心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

どうやらこの男の子とぶつかってしまったらしい。

…あれ?? 見たことがある顔。

「いえ、こちらこそすいません…」

私はそう言いながら男の子の顔をあらためて見た。

明るい栗色の髪。

大きな猫目。

服装から男の子と判断したけど、女の子だと思えばそう見えないこともないような中性的な顔立ち。

入学してから一週間の記憶をたどってみる。

…ああ、そうだ。

この子とはたしか、同じクラスだ。

緊張のせいで、クラスのメンバーをよくみていなかったからおぼろげにしか思いだせないけど、たしかそ

うだった気がする。

「良かった！んじゃ！」

男の子は私に背を向けて、運動場に向かった。

私も制服についた砂を軽く払い、校門の方に向き直る。

「…あれ??」

ころころ…

目の前にサッカーボールが転がっていた。

これ…さっきはなかったような…

そつとそれを拾い上げる。

もしかしてさっきの子が落としていったんじゃ…!

私は慌てて運動場の方に向き直り、なんとか声が届きそうな距離にいた男の子の背中に向かって声をかけた。

「あのっ!」

精一杯声をだしたつもりだが、いまいち大きな声は出なかった。

それでもなんとか男の子には届いたようだ。

彼は足を止めてこちらを振り返った。

「ん?オレ??」

きよとんとして自分を人差し指でさしながら首をかしげる。

「これ…違いますか…??」

私はおそおそと男の子にボールを差し出した。

ぱつと男の子の顔が明るくなる。

「そう！なんか手がさみしいと思ったら、落としてたんか！！」

男の子はこっちにかけてよってきて私の手からボールを受け取った。

そして、

「ありがとう！！」

私にむかって、にっこりと笑った。

驚いて目を見張る。

それは私の16年間の人生の中ではじめてみた、

眩しいほどに明るい、太陽みたいな笑顔だった。

プロローグ 菜ノ花side（後書き）

前投稿からだいぶあきました…

ので、新しい連載を始めます！

文章力もなく、へたな物語ですが、読んでいただけたらうれしいです

出会い 菜ノ花 side

「あっ！昨日の子や！！」

教室に入るなり、昨日の男の子が少し驚いたように言った。

いきなりのことですべてどうしていいかわからず、とりあえず小さく頭を下げる。

私が席につくと、彼は私の机に手をついてにっこりと笑いながら話かけてきた。

「同じクラスやってんなあ！全然知らなかった！！てか、転校生！？」

「は、はい…一応…」

「やっぱり！！じゃあ今日転校してきたばっかやな！大変やと思うけど頑張りや！」

「えっと…」

彼は全く悪気のない無垢な笑顔を私に向けている。

一応転校してきたのは2週間前なのだが…

まあ、こんなに地味で目立たない女の子なんて、いくら転校生でも覚えていなくて当然か。

バシッ！

私が頭の中で納得していると、突然女の子が彼の背中を叩いた。

「おまえは何失礼なこといってんねん！この子は2週間前に転校してきた笹川さんやる！！」

男の子は背中をさすりながら首をかしげた。

「え???そうやっけ???」

女の子はため息をつくとき、私に向かって笑いかけた。

「ごめんなあ。こいつがえらい失礼して。」

金髪にツインテールで、女の私でも思わずどきっとしてしまつようなすごく大人っぽくて美人な女の子。

「い、いえ…そんな…」

私が首を振ると、女の子は笑いながら手を横に振った。

「そんな緊張せんでもええで！あっ！ウチ、三浦恵美！遅くなつたけどよろしく！！んで、ついでにこ」

のアホは西崎光や！一応覚えといたって！！」

早口で話されたので驚きながらも女の子がしてくれた自己紹介を整理する。

「え、えっと…三浦さん、と西崎くんですね。」

私は女の子と男の子を順番に見て確認した。

「そんな名字にさん付けなんかせんでええって！恵美でええよ！」

女の子…三浦さんは笑ってそう言ってくれた。

「じゃあ…恵美…ちゃん??」

他の女の子を下の名前で呼んだのはいつぶりだろうか??

緊張して、少し声が小さくなる。

「んっ！それでええよ…！」

三浦さん…いや、恵美ちゃんは満足そうにならずいてくれた。

「えー！じゃあオレも名前で呼んでやあ！」

突然西崎くんが割って入ってきた。

いや、女の子を下の名前で呼ぶのも緊張するの…男の子はちょっと…

「ええと…」

私が苦笑いで首をかしげていると、恵美ちゃんは西崎くんの肩をこづいた。

「笹川さんの自己紹介のとき爆睡してたやつにそんなふう読んでもらえる資格があると思ってるんかおまえは!!」

「思う!」

「そつやな、おまえやったら思うな。聞いたウチがアホやった。」

「あつ!そういえばオレ、そんなとき夢の中でサッカーのシュート決めてたで!」

「何をどや顔しとんねん!どうでもええわ!」

2人が言い争いを始めたのをみて、私は思わずくすりと笑った。

なんだろう???

これは関西特有なのかな??

なんだかテレビの漫才を見ているみたい。

突然2人の言い争いが止まった。

あれ?

笑ってはいけない雰囲気だったのだろうか??

私は慌ててぺこりと頭を下げた。

「し、ごめんなさい!笑ってしまつて!」

「名前…」

私の謝罪に返事もせず、西崎くんがぼそっとつぶやいた。

「名前！…なんやつけ？？」

突然明るい声で尋ねられて、私は戸惑いながら答えた。

「さ、笹川菜ノ花ですけど…」

「んじゃ菜ノ花！！」

いきなり下の名前を呼び捨てで呼ばれた。

西崎くんにとっては普通なのかもしれないが、思わずどきっとしてしまっ。

「よろしくな！！」

私はまた、西崎くんの顔に、

あの笑顔を見た。

出会い 菜ノ花 side (後書き)

タイトルは「出会い」にしましたが、光と菜ノ花はプロローグに
応出会ってますね(; _ ;)

まあ、今回は恵美との出会いと光とのあらためての出会いという
とで(*^_^*)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607z/>

キミは太陽

2011年12月28日02時54分発行